

教育センターだより

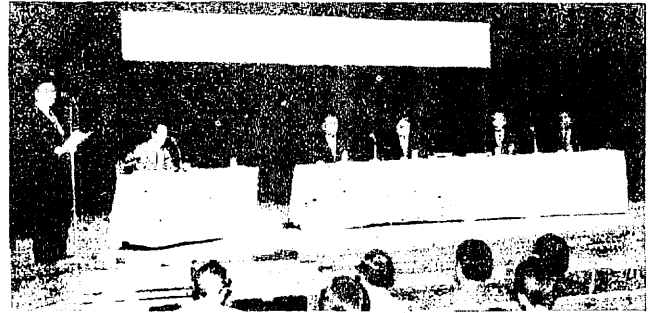
第2回夏季教育セミナー特集

テーマ「これからの学校教育を考える」



受付風景

	1:00	1:40	2:00	4:00
8 / 17	20周年 式典	開 会 式	シンポジウム	



数々の貴重な提言がありました。(シンポジウム)

	10:00	12:00	1:00	3:30
8 / 18	1 経過説明	昼 食	課題別協議会	
	2 研究発表	休 憩	プロジェクトによる3分科会	

創立20周年を迎えた当教育センターは第2回夏季教育セミナーを8月17・18日の両日、秋田市文化会館で開催した。参加者は2日間で延べ900名を越える盛況で、今後の教育の方向や、秋田県の教育の在るべき姿についての当教育センターの研究発表やシンポジウム講師の方々からの貴重な提言があった。今回は特集号としてその内容の一端を紹介する。

17日午後1:40分からセミナーに先立ち、開会式が行われたが、橋本県教育長、藤田当教育センター所長から次のような挨拶があった。

橋本県教育長挨拶(要旨) 国際化、高度情報化、高齢化等の大きなうねりが押し寄せている現在、教育も21世紀を展望しながら新たな出発をすべき時である。昨年度のセミナーで、本県の児童生徒は、自ら進んで課題を解決する力が弱いと指摘されているが、たとえこれが事実としても、教育に携わる者はこの責任を児童生徒に負わせるのではなく、自らに投げかけられた大きな宿題として受け止め、その解決策を模索してほしい。

個性重視、児童生徒中心の教育への転換を図ろうとしている流れの中で、本県教育をどういう方向に舵(かじ)取りをするのか、このセミナーで論議を深めていただきたいものである。

藤田教育センター所長挨拶(要旨) 本県教育は、昭和57年以降「心の教育」や「基礎基本の重視と個性を生かす教育」に取り組んできたが、その成果は必ずしも十分ではなかった。教育センターでは、登校拒否、高校中退、基礎学力の未定着などの事実を厳粛に受け止め、今後の研究をより実状に即したものにしていきたいと考えている。シンポジウムのテーマを「秋田県の学校教育を考える」とした意図もそこにある。本県学校教育の在り方について様々な立場・観点で考える機会にしてもらいたい。

も く じ

第2回夏季教育セミナー特集

- ・ 県教育長・教育センター所長挨拶、日程等……………1
- ・ シンポジウム発表要旨……………2・3
- ・ 研究経過説明と研究発表要旨……………4・5
- ・ 課題別協議会の内容と参加者の声および
平成元年度秋田県教育研究発表会の御案内…6・7・8

第 46 号

平成元年9月20日

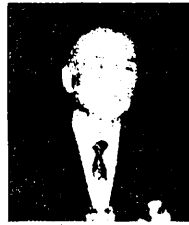
秋田県教育センター

秋田市仁井田緑町4番2号
☎ (0188) 32-3594

これからの秋田県の学校教育を考える 豊かな心と発言する勇気を シンポジウム発言要旨

☆ シンポジウムは十七日午後二時から三時間にわたって五人によ
☆ る講師陣で今後の秋田県の学校教育の在り方をめぐって話し合
☆ いがなされた。特に豊かな社会にあつて「心の教育」「物言わぬ
☆ 県民性」が問題となり、その他示唆に富んだ提言が多く、出席
☆ 者の共感を呼んだ。

大切にしたい「心」の問題



平間 文次氏

日本の過去の教育遺産

戦後、日本は驚異的な発展を遂げましたが、この基盤は、江戸時代の寺子屋から明治、それ以降の教育の充実にあり、これが実を結んで、日本の労働者が質的に極めて高かったからだと思ひます。

ソニーでは、最初上意下達式に会社を経営してうまく行かなかつたので、古い日本式の集落の寄り合いのスタイルを採り、若い人や会社の人全体に色々と発想を促したところ経営改善が促進されたと申します。

この事実は、日本人全体がそれに十分対応できるだけの素質が培われていた証拠だろうと思ひます。
現在の教育課題

しかし、現在の教育に問題がないわけではありません。

特に重要なのは、「心の問題」です。物質的には豊かになりましたが、核家族化が進み、大家族のよきもなくなり、親の背中を見て子供が育つということも少なくなり、真の意味の愛情に飢えている子供が多くなっています。

今後の教育課題

日本人は「生むには下手だが、育てるには上手だった。これからは、生んでいかなければならない時代である」と指摘されております。一定の水準に達するだけではなく、頭抜けた人間を育成することも必要になってきます。

「個性重視」が叫ばれておりますが、「個性とは型より入って型より出づる」ものです。ですから義務教育段階では基礎基本の定着のために指導の個別化も必要ですし、高校段階では、一人一人の適性を把握した上で、コース制の設定も必要にな

ってきます。

ただ「個に應じる」と簡単に言っても教材作り一つをとっても大変な労力ですから、今後は教師同士の横の連携が必要になってくるでしょう。

地域教育力を学校教育へ



藤川 浄之氏

地域とのかかわりを大切に

地域とのかかわり、これを抜きにして今後の学校教育は考えることが出来ないだろうと思ひます。

学校や子供は社会の共通の財産であり、これらを中心に地域がまとまり、連帯感を確認し合つていきます。そのいい例が高校野球や少年野球です。

野球だけではなくありません。例えば、勤労体験学習一つをとつても先進農家と子供たちとの触れ合いのなかから、子供たちは無論、農家の方でも前進のエネルギーを見出していく事例もあります。子供たちが郷土の歴史をお年寄りから学び、共に地域の将来について考え合う、このような例にふれる時、私は「学校は学習の場であると共に社会化の広がりの中心」という風に考えます。

秋田県という地域社会の今後の在り方、そして一人一人の生き方にして、地域と学校の係わりを抜きに

して考えることは出来ないだろうと思ひます。

本県の県民性

今年には市制百年、今回の新指導要領では地域百年の歴史を見直すように強調されています。

五十年前の郷土研究では、本県の県民性を「物言はず、敢然と事を行はず」と指摘、そこから「下から上への教育」という課題を提起しています。地域から積み上げていく「社会化」ととらえることもできません。

子供の実態から教育改革を



船越 準蔵氏

「助け合う心」が第一

いま、知識や技術や、地位や財産のある人の中に、人間性だけは持ち合わせていないという人が目立ちます。この現状は黙視できません。

子供を教育するのに、第一に念頭に置くべきことは、「助け合つて生きる心と力」の育成です。それが人間性の根幹だからです。

親や町の人だけでなく、学校の教師までが時代の風潮に流されて教育の灯を見失い、すべて教育活動は人間性の育成のためにあることを忘れて、受験用の点取り第一に子供を追

い立てるようであれば、二十一世紀は灰色になるでしょう。生きる喜びを、どの子にも

若者や子供たちに、登校拒否や中途退学、直後退職など、無気力に挫折する例がふえている状況は深刻です。

不出来や下手のあることは、子供のせいではありません。可能性も限界も千差万別の子供を、画一すれば必ずはみ出します。

どんなハンディを負った子でも、必ず奥底に隠し持っている「役立つ力」を、あの手この手で見つけてあげて、生きることへの喜びと勇気とを与えることが、教育の方法の原則だと思えます。

開かれた学校に
子供の問題行動の原因をさぐっていくと、ほとんど例外なく大人に行きつきます。

これまで守秘義務ということで世間に語らなかつた「教師の隠し事」を、できるだけ公にして、大人が健全に育つた分だけ子供が育つのであることの理解を深めるべきことが一つ。

もう一つは、学校が、朝早くから暗くなるまで、休日もなく子育てを独占することをやめて、家庭や地域や民間の施設に、思い切つて子供を帰してやるべきです。

学校だけでは次代を負う子を育てることはできないからです。

かわいい子には旅をさせよ



前川盛太郎氏

施設・設備は整つたのに。。。

現在、教育はどの市町村でも一番大事な課題に据えております。子をおられない親はないし、社会的にも立派な子供を世に送り出したいからです。この点では与党も野党もありません。そういう訳で、現在ほど教育の施設、設備の整つた時代はありませんでした。にもかかわらず、現在ほど教育の荒廃が嘆かれ、教育改革が叫ばれている時代はありません。心を大切に

これは、やはり「心」を見失っているからだろうと思えます。「年少の人間に民族の文化遺産を伝達しなければそれは教育ではない」と清水幾太郎氏は喝破しております。機械化の進むなかで、難しいことですがこのことなしに教育の前進はないと考えております。

可愛い子には。。。

私は三年前から、一週間子供たちを親から離して、県立少年自然の家から登校させています。炊事洗濯一切を子供等自身にさせるわけです。

最初は親も教師も反対していましたが、終わってみて子供たちは「初めて親の有り難さがわかつた」と感

想をもらしております。最も感動したのは、小学六年生が「生きることの厳しさ喜びを知りました」と発表したことです。物が余っている現代、子供たちにいかに生活体験の学習をさせる機会が少ないかを物語っていると思えます。

教師への注文

教育の問題、今後の社会の在り方を考える時、物質の豊かさ、たて前論だけでは、必ず行き詰まりがきます。

ですから、例えば高齢化社会対策として、教師は率先して施設のお年寄りの世話をするとか、登校拒否対策としては「学校に行くのが楽しい」と思わせるように工夫をこらすこと等が大切になってくると思えます。

発言する勇氣と論理性の育成を



三浦 順治氏

私は、「先生たちは勇氣を持ち、生徒たちには勇氣を与えよ」ということを提案します。換言すると広く求める勇氣、物を言う勇氣、信じたことを行う勇氣です。

広く求める勇氣とは、先生たちが積極的に研修しようとする勇氣です。物を言う勇氣とは、自らが考え、発

言し、書き、主張する勇氣のことです。

特に、物を言う勇氣は、秋田県人に最も欠けているもので、自分の考えを正確に相手に伝える教育の充実に図っていくべきと思えます。

アメリカの大学で、世界各国から集まって来る留学生を見てみると、日本人が一番物を言いません。その日本人の中で更に物を言わないのが秋田県人です。発言し、相手を積極的に説得することがなければ、幾ら頑張つていても、人は認めることもないだろうし、不当に過小評価される結果になります。

相手を説得するには、前述の勇氣とともに、しっかりした論理をもつて順序立てて話す必要があります。

秋田県のこれからの教育は、こういう点が大切だと考えます。

講師

- 平間 文次氏 (本荘市教育長)
- 藤川 浄之氏 (秋田魁新報社編集局長)
- 船越 準蔵氏 (大森山少年の家所長)
- 前川盛太郎氏 (岩城町長)
- コーディネーター
- 三浦 順治氏 (秋田大学教授)

研究経過説明と研究発表要旨の紹介

研究テーマと研究の経過について

当教育センターは、共同研究にウエートを置き、一昨年より三つのプロジェクトチームを結成した。各プロジェクトは、教育の今日的課題をさぐり、次のような研究主題を設定した。

・「国際理解を深める学校教育の在り方」

(第Iプロジェクト)

・「パソコンリティの変容を促す教育相談の在り方」

(第IIプロジェクト)

・「学校教育における自己教育力育成の在り方」

(第IIIプロジェクト)

いずれも三か年計画の研究であるが、第Iプロジェクトは今年度が二年目に当たり、第II及び第IIIプロジェクトは研究の最終年度に当たっている。

第Iプロジェクトの「国際理解教育」は一年目の

けや各教科・領域での実践のための参考資料の作成など、実践に関する研究に着手している。

第IIプロジェクトの「教育相談」

は、県内の児童生徒と教師のかかわりについて意識調査を行い、その分析に取り組んだ。その結果、生徒は教師にどう見られているかという意識の違いによって日常の教師へのかわり方が大きく影響されていることが分かった。最終年度の今年度は児童生徒と教師との望ましいかわり方について考察を進めており、来年度はその研究成果を刊行物としてまとめる予定である。

第IIIプロジェクトの「自己教育力」

は、初年度において自己教育力の概念規定と県内児童生徒の自己教育力の実態調査を行った。

二年目の昨年度は調査の分析・考察を深め、本県児童生徒の自己教育力の特徴的傾向をまとめた。

さらに自己教育力の究極の目標である「へ生き方の探求」に焦点を当てつつ、自己教育力を高めるための方策等について提言した。

二年目の後半からは、研究協力校との共同研究に入り、実践資料の収集等を行っている。平成二年三月には研究を刊行物としてまとめる予定である。

(研究推進委員会)

国際理解教育をすすめるにあたって

国際理解教育の必要性は今更いうまでもなく、「教育課程の基準の改善」でも重要な柱として述べられている。当教育センター第Iプロジェクトでは、この学校における国際理解教育の取り組みについて研究を進めてきた。

まず大事なこととして、学校のあらゆる教育活動を通して推進することである。教員全体の共通理解をはかり学校教育目標の中に国際理解教育の理念を明確に盛り込み、そのうえで重点目標を決め、指導計画に表すことが必要である。さらに教科・道徳・特別活動の領域での指導およ

び学年間の関連性に考慮し、校内の組織の整備もしなければならぬ。

学校の教育活動の中で大きな位置を占める教科の指導は最も大切である。社会や外国語または芸術の教科での指導は、その内容や目標が国際理解教育の理念に直接通じるものが多いので、国際理解教育は社会や英語でという考えが多いようである。しかしすべての教科で国際理解教育を実践しなければ効果はあがらないと考えられる。

数学、理科、保健体育等で、国際理解教育の内容を直接扱うことは少なく、国際理解教育を進めるには困難な教科だと考えられがちであるが、直接授業の中で扱うことがなくても、関連する内容を国際理解教育の立場で指導することは可能である。たとえば、保健体育の授業で外国で考えられたスポーツの種目を学習する時、そのルールの中に生かされている国民性やスポーツに対する価値観にも触れることができ、また、日本で生まれたスポーツと比較することによって、国民性や歴史の違い、スポーツ精神の共通性を知ることにも可能である。オリンピックに代表される国際的規模の競技会は、国際交流に大きな貢献をしてきた。数学や理科でも国際理解教育の視点で、関連する内容は多く見つけたことができる。

学 校 教 育 を 考 へ る 今 日 の 学 校 教 育 を 考 へ る 今 日 の 学 校 教 育 を 考 へ る



研究テーマと研究経過の報告

世界に共通する内容や、民族による意識の違いからくる研究の紹介など、国際的視野を持った児童生徒の育成のために多くの教材が見つけれられる。

パーソナリティの変容を促す教育相談の在り方

近年、登校拒否などいわゆる問題をもつ児童生徒が多くなってきた。

しかし、一人一人の児童生徒はそれぞれが生きる目標をもち、明るくたくましく生きる力をつけるとともに、様々な危機的場面を乗り越え、ひいては変化する社会を主体的に生きていけるように成長するものと考えられる。

そこで、特に学校生活では児童生徒と教師がどのようなかわり方をしているか、互いにどんな意識をもち、どうありたいと願っているのかについて調査をし、それが児童生徒の人格的な発達にどうかかわっているのか、またそのための望ましいかわり方はどうかあればよいかについて考察を試みた。

調査分析の結果、教師と児童生徒の間に意識の違いが見られる部分も相当あり、更に校種別に見た場合の差異も認められた。これらの「意識の違い」をどうふまえ、どんなかわり方をすることが「教育相談の在り方」になるのかを追求してみることにした。

教師の児童生徒へのかかわりにつ

このような視点で本年は数学・理科・保健体育を取り上げ考察した。
(第Iプロジェクトチーム)

いては、教師は多様化している児童生徒に対応し、「いろいろなかわり方」をしていかなければならないということが前提となる。

その基本は、教師が児童生徒の発達段階に応じ、児童生徒を「正しく理解」し、児童生徒の「心情を踏まえたかわり方」をすることである。こうした意味で、児童生徒の「自己実現」を図るためには、教師中心の

一方的、画一的なかわり方でなく、もつと児童生徒一人一人に「人間的なふれあい」を重視したかわり方をしていかなければならないのではないかと考える。

そのためには、児童生徒の学校生活において、どんな相談にも対応できるような「教師側の態勢づくり」が必要である。

しかし、児童生徒が教師に相談する場合はもちろん、教師と児童生徒へのかかわりの場合にあつては、やはり児童生徒と教師との信頼関係が土台であるということをもつと強く意識しなければならぬ。

最後に「パーソナリティの変容を促す教育相談の在り方」は学校教育相談の働きとしては究極の課題とい

うべきものである。今回の年次研究では、特に日常的に最も大事であると思われる「教師と児童生徒とのか

学校教育における自己教育力育成の在り方

研究のねらいは、本県学校教育における自己教育力育成の望ましい在り方を求めて、次の四つの内容を究明することである。

- 1 自己教育力の育成が、これから学校教育で果たす意義を探る。
- 2 本県児童生徒の自己教育力の実態を探る。
- 3 県内学校の教育実践事例から、自己教育力育成についての手がかりを探る。
- 4 自己教育力育成の実践的な在り方・進め方を探る。

本研究の特色の一つは、「自己教育力の育成は、学力向上の基盤となる」という仮説のもとに出発した点とである。調査研究等から、この仮説は立証できたものと確信している。いま我々は、「自己教育力育成は、人間の主体的発達という自己実現を目指す教育であり、そして、それは県民が学校教育に最も期待する学力向上を目指す理念である」という構図を、自己教育力育成の価値と捉え、その認識に支えられて研究を進めている。

これまでの研究結果から、自己教育力を育成するに当たって克服しなければならぬ多くの課題が浮き彫

かわり」に焦点を合わせて研究を進めたものである。
(第IIプロジェクトチーム)

りにされた。これらを踏まえて、自己教育力育成の在り方・進め方について、基本的な視点を提言する。

- 1 学校教育目標の改善
自己教育力育成を目指す学校経営においては、学校教育目標の設定において、「自己教育力」を適切に位置づけることが求められる。
- 2 教育課程の改善
学校教育目標の具現化のためには各学校がかかえる自己教育力育成の障害要因の分析が求められる。さらには、問題点を焦点化し、実践的課題を設定したうえで、教育課程の具体的な編成が迫られる。
- 3 学校環境の整備
自己教育力育成には、各学校の教育的環境全体の見直しが必要である。特に、人的環境、家庭・地域的環境に目を向けたい。
- 4 学級経営の改善
学級は、児童生徒の集団意識を方向づけ、人間としての多面的な発達を促すものの見方、考え方を培うために最も身近な自己教育力育成の基盤である。学級経営の改善が求められる。

以上が、発表の骨子である。
(第IIIプロジェクトチーム)

国際理解を深める 学校教育の在り方 (第一分科会)

第一分科会は、約七十名が参加して、学校教育の中で国際理解教育をどのように進めたらよいかというテーマで話題提供なら

課題別協議会から

○18日、午後1時からは課題別協議会が行われ、話題提供やフロアからの熱心な発言があった。以下はその報告である。

最初に、小・中・高校の教員三名と当教育センターの指導主事一名の話題提供者から報告があり、次に質疑や意見の交換が行われた。その内容は次のとおりである。

井川小学校

(南都 進教諭)

国際理解教育を、教育目標の具現の場として、あらゆる教育活動の中に位置づけ、全職員が組織的計画的に行うことを基本に据えて実践している。

具体的には、全年及び各教科、道徳、特別活動等の重点目標を掲げ、綿密な目標に基づいて実践した。英語指導助手のローラー先生とのふれあい

タイムではアメリカのお正月の話

聞き、自国のお正月の伝統行事と比較する等、創意工夫のある報告であった。

仁賀保中学校 (五十嵐静也教諭)

「生徒の心の世界を広げる国際理解教育はどうあればよいか」という研究主題を掲げ、平成元年度から三年計画の研究の取り組みの中間報告がなされた。日本人としての自覚を高めること、「異文化の理解」を促進することを本校の国際理解教育の目標に掲げ、教科指導、道徳・特別活動、環境・資料研究部の三つの研究部を組織して全教育活動の中で取り組もうとしていることが報告された。

金足農業高校

(高宮恵子教諭)



修のためにカリフォルニアに生徒を引率して、そこで見聞したこと、考えたこと等の報告であった。

生徒たちは、この研修でアメリカの農業の現状や高校生の実態を目的の農業者と交流し、コミュニケーション(意思の伝達)がうまくできなくて大変苦労した。語学の勉強は、まさに国際理解教育の第一歩なのである。

最後に十日間という短い期間であ

ったが、異国の風土や文化に接したことは、国際感覚を養う貴重な生活体験であったと結んだ。

教育センター(米田進指導主事)

日本経済の拡大の過程で外国との相互依存関係が緊密となり国際化、国際交流が盛んになり、国際人としての資質が問われるようになった。このような背景のもとに学校教育の中にも国際理解教育が明確に位置づけられた。特に、英語教育では、英語指導助手(AET)の導入により「話せる英語教育」を目指した授業の在り方やAET導入による生徒の反応(例えば英語に関する児童生徒の興味、関心が高まった)やAETの見方(例えば生徒の反応が不十分で、自発的に自分の意見を述べる習慣が確立されていない)等が報告された。

以上、四名の報告に対し、活発な意見や質問があった。中でも「昼食時の給食のメニューの中や、外国人を迎える際のマナー等の中にも国際理解教育の題材をとらえることができる等、学校生活の気づかない多くの場面が「国際理解教育」につながることを確認し合い、今後の国際理解教育の在り方に示唆を与えた。

参加者の声

グローバルな視点を

五城目一中教諭 加藤 義夫

国際人の条件として外国語に堪能

であることがよく挙げられるが、中学校での外国語学習を始めさせる前に、生徒の発達段階に応じた国際理解への基礎的な資質を養っておくことが必要であろう。それは、グローバルな視点に立って事物を見つめ、考え、そして異文化間理解を通して、外国人と円滑な人間関係を成立させようとする態度を身につけさせることであり、このことが国際理解教育の基礎となろう。

「国際理解」への

一つの視点

秋大附中教諭 塩 澤 清

国際理解は基本的には民主主義の精神である個人の尊重にあり、国民全体の問題である。これには二つの側面がある。一つは自分が他者を理解することであり他の一つは自分を他者に理解してもらうことである。表裏一体の密接なからみ合いをもつが、別個の行為であるので別々に考えてみる必要がある。

夏季教育セミナーにおける提言は正しいが、二つ目の側面への取り組みが一層実践的内容であることが望ましい。今後の研究に期待したい。

これからの子育ては

どうあればいいか

(第二分科会)

1、ねらい

これから、世の中がますます進歩発展し、忙しくなっていくにつれ、教育が「心をこめた子育て」から離れて、「機械的な教育」になっていきはしないか。

こういうことから、これからの「在るべき子育て」の手応えをいくらかでも探ってみようと思つた。

そのために、親子三代の先生の四人にそれぞれの立場からの御提言をお願いした。

2、話題の提案と提案者

(1) 祖父の立場から

秋田県生涯学習センター

相談員 佐藤 公氏

① 孫と目の高さを同じにする、つまり、寝転がって見ると食べていけないもの危険なものなど、いろいろ見えてくる。

② 育ちを長い目で見ることに、他と比較しないこと、大人の焦りや心配は子供に不安を与える。

③ 優しさと甘やかしの区別をすること。子供を大事にする厳しさというものがある。

(2) 父の立場から

秋田県青年会議所理事長

古川 毅氏

① 「人のためになる生き方」ができる子供を育てるために親は志の開発プログラムを持つこと。

② 故郷を愛する心を持つ子供を育てる運動を進めていること。
③ 孫の立場から

秋田大学教育学部心理学専攻
二年生 杉野 美幸氏

① 個人および個性の尊重

小学校のころ、学校に来ると物言わない子がいたが、随分特別視されていた。表面的な理解にとどまらないで子供の心や特質を見極めた扱いをしてほしいと思つた。

② 子供時代は冒険心あり、好奇心も旺盛であるから、自然の中で遊べる手立てを考えてもらいたい。

(4) 教師の立場から

秋田県教育センター

指導主事 海山弘次郎

「教師の児童生徒へのかかわり」の調査研究から

* 学校での教育相談のかかわりの必要性和問題行動の予防についていくら口先で「挨拶をしなさい」と指導しても、教師と児童生徒の間に信頼感がなければ、心から発した本当の挨拶とはならない。その心を育てることもできない。子供は自分を愛する人を愛しそこから人間として大事なものを学んでいくものである。

3、協議

次のようなことについて話し合いがなされた

(1) 家庭との連携の実践例について
大曲小 高山教諭

(2) 教育相談のなかかわりの実践例について
男鹿東中 鈴木教諭

(3) 第IIプロジェクトの研究発表の数および統計的読み取りについて
新屋高 加藤教諭他
(4) まとめとして、次のお二人の感想を頂いた。



① 田沢小学校 栗谷川教諭
家のこと、勉強のことなどを話して来る子供がいる。その時は仕事をやめて聞くようにしている。

② 秋大附属中学校 小笹教諭

問題を持つ子供と共にある時、私たちの人間観や教育観として価値観が問われ続けるのである。日常の一つ一つを子供と共に心をこめて行って、自らを高めることを怠ってはならない。

参加者の声

教師はがまんを
〔質保高校教諭 田口 克子

「パーソナリティの変容を……」のタイトルにひかれて参加してみました。直接うかがうことの少ない現場にない方々の話題提供や小・中学校の先生方の事例など、大変興味深く拝聴しました。特に、「教師はじつがまんすることだ」というお話は、今の私には重いことばでした。

現場には役立たない一般論
男鹿東中教諭 鈴木 利雄

第二分科会では、それぞれの年齢から、立場から見た子育ての考えのべられたが、具体的にこうしたらよいという対策はやや希薄のように感じられる。自分の実践から出た成功例、失敗談から意外と子育て問題解決の手口が見いだせるのではなからうか。一般論や理想論では体験の少ない若い教師にとってはすぐ現場で役立つ学習にはならないように思える。初任研の先生方にはやや内容が重すぎたのではなからうか。もっともつと事例を発表(発言)できる現場教師の参加がほしい。

自己教育力育成の在り方

(第三分科会)

第三分科会では約三四〇名が参加して、「学校教育における自己教育力育成の在り方」をテーマに話し合いがもたれた。
「教科指導」「道徳」「特別活動」の各領域から、この主題のもとで研究成果を発表した。
教科指導における自己教育力
教科指導が「人間教育」の一環で

あることを再確認し、指導において教師の人間観が問われることになる。

自己教育力を構成する要素を、「学習への意欲」「学習の仕方の習得」「生き方の探求」の三つとした。しかし調査によると、学年を通じて低くどまっている要素や学年進行に伴い低下する要素として、前二者にかかわるものが多い傾向がみられた。せっかくの教師や学校の努力が子供たちの中に自己教育力として結実していないのではないか。この二つの習得は生きる力と、極めて密接に関連しながら、しかも実践力を伴ったものと考ええる。学び方だけを切り離して考へるべきではない。実践に当たって特に重要な点として次のことを提言する。

- ① 自己実現を求めるとの意義を感じさせる指導の展開
- ② 個人差に応じた指導の展開
- ③ 表現活動を重視した指導の展開
- ④ 自己評価力を重視した指導の展開

道徳における自己教育力
新学習指導要領では、変化の激しい社会に主体的に対応し、たくましく生きていく力をはぐくむという観点から道徳教育を一段と重視していることを確認した。自分の生き方を考え、希望を持って強く生きる主体的な人間を育成する道徳教育はまさに自己教育力に直結する。

自己教育力にかかわる下位要素と指導要領の道徳教育目標のキーワードとのかかわりを検討し、「自己教

育力」を培う場合の主要な三項目に

- ① 学級の間関係重視し、「自主性成就感」などを培う。
- ② 道徳の時間を充実させて、価値観を深め、自己の「生き方」についての考えを培う。
- ③ 豊かな体験活動を重視し、社会性創造性を培う。
- ④ 基本的な生活習慣の育成を重視し、「自己理解」「社会性」などの素地を培う。

特別活動における自己教育力

指導要領の特別活動の目標にあるキーワードと自己教育力の下位要素とを照らし合わせて考察し、特に特別活動において自己教育力育成の中心となる構成要素を明らかにした。「成就感」「自己評価」「自己理解」「創造性」「社会性」「責任感」「向上心」などがそれぞれである。



自己教育力の育成に当たって大事なことは、
で自己教育力とは何か、描く子供像とはどんなものか、といった基本的理念を、
一人一人の指導者が念頭に置いて取り組む必要があるとした。また、
教育の成果のいかんは、指導に当た

る教師の態度に影響されるところが大であることを強調した。

「学級活動」「生徒会活動」「クラブ活動」「学校行事」などの各内容における自己教育力育成の観点が示された。

特別活動に関しては、意義についての理解や指導計画、時数の確保、評価などにおいて、学校間、教師間に格差が大きいこと、全体的に指導体制が不十分であることを指摘し、人間の触れ合いを基盤とする指導など六項目を提言して発表を終えた。

参加者の声

示唆に富む自己教育力研究

戸米川小教頭 中川 康 三
「自己教育力」を実際の教育活動に位置づけるうえで、特に次の三点について示唆されることが多かった。

- ① 自己教育力を生涯学習を支える力、生き方に収束する問題としてとらえたこと。
- ② 下位要素が示され、調査によって、自己教育力に関する子供たちの特徴的傾向が明らかにされたこと。

と。
③ 協力の先導的な研究によって、指導のための具体的な方策が提示されたこと。

教師自身が学び続けること

土崎中学校教諭 船木 菊子
「自己教育力の育成」という時代の要請にマッチしたテーマであるだけに、文化会館にあふれる熱気の中の研究発表は、入念な実態調査と協力校を得ての開かれた研究という意味で、内容も現実的でしかも深みのあるものでした。特に強く感じたことは
① 「自己教育力の育成」は、地域や父母をも含めた全体計画のもとで全教師の共通理解によって推進すること。
② 一人の教師が、自己教育力を育成するという立場から、自分の教科や学級経営の見直しをする必要があること、そのためには、先ず教師自身が学ぶ教師であること等でした。

平成元年度

秋田県教育研究発表会の発表申込受け付け中

主管 秋田県教育センター
期日 平成二年二月十四日(水)
十五日(木)二日間

発表分野 ① 学校運営 ② 教科指導 ③ 教科外指導 ④ 情報処理・視聴覚教育 ⑤ 特殊教育 ⑥ 幼児教育

発表者 県内の幼稚、小・中・

高校及び特殊学校に勤務する教職員並びに教育関係機関の職員
発表申込について
所定の用紙で九月三十日まで教育センターに申込みこと
講演 講師 五十嵐武士氏
(男鹿市出身 東大法学部教授)